

「てまりの華」講演会記録

日時：2018年10月15日 19:00～20:30

場所：札幌エルプラザ 4F 中研修室

ご講演者：株式会社ライズリング 代表取締役 渡邊 譲 様

演題 てまりの華ってこんなところ！
～住み慣れた町で、普通に暮らす～
赤ちゃんから高齢者まで
障がいがあってもなくても、共に暮らす家族になれる場所
いきがいデイ雪の華&富山型地域共生ホームてまりの華より

1. ご講演者の自己紹介

札幌市生まれで現在江別市在住。養護学校の教師を目指して愛知の日本福祉大学で地域福祉と障害児心理・教育を専攻。その間に介護の現場に触れて、特別養護施設に勤務。北海道に戻り介護職等を経験したが、大規模施設の限界を感じて退職。平成24年に株式会社ライズリングを設立。奥様は歯科衛生士、介護支援専門員で共同して設立。歯科衛生士として「食支援」に力をいれている。歯科衛生士として「飲み込むところ」までケアし、誤嚥の防止などに気を配っている。「口で食べること」が重要と思っている。

2. 現在の活動内容

平成25年に高齢者デイサービス「雪の華」開設、食支援に注力している。ケアマネ5名

平成28年に富山型地域共生ホーム「てまりの華」を開設。

「相談支援事業所てまりの華」で障がい児、者の相談支援をしている。

10月から「てまりの華」のサテライト事業所「おむかいさん」を開設、児童の定員を20名に増加。

再来年には地域共生型看護小規模多機能ホーム+5部屋の障がい者グループホームを開設予定。

地域共生型看護小規模多機能ホームは新しいサービスで、「地域の誰もが、自宅から、通えて、泊まれて、訪問してもらえる医療と福祉の拠点」となるもの。現状は介護サービスの枠組みであるが、今まで別枠であった障がい福祉事業も併せて提供できる「共生型サービス」に含まれる。看護師も常駐しており、医療行為も可能となる。

3. 「てまりの華」はどんなところか

「富山型デイサービス」で、いつでも、だれでもが利用可能。普通の2世帯住宅（築50年）を改造しただけなので、バリアフリーではなく段差が多いが、広くて生活感がある。でも利用者で突っかかる人はいない。身体機能的にはかえって良いと思っている。住宅地にあり、最初は迷って来られない場所で、車の通りもほとんどない。高齢者や子供（障がい児含む）と一緒に地域に密着して利用している。また自宅の隣であり、他の施設も徒歩圏内に集約している。

4. 「富山型デイサービス」とは

平成5年に富山県で始まったデイサービス。介護保険以前の行政が入所などを指定していた時代に、「自分の家で死にたい」と希望する高齢者の意思が叶えられないことに疑問を持った惣万佳代子氏が、最初の民間デイサービスを立ち上げた。高齢者対象と考えていたが、利用希望者に障がい者が来て、在宅サービスが必要なのは高齢者だけでないことを認識した。いろいろなサービスを一緒に提供する形態として始まったもの。

富山県以外では「共生型デイサービス」と言われる。富山県では25年前から実施しており、補助も充実している。

5. 「てまりの華」はどのように開設したか

江別市と石狩振興局（道庁組織）に相談したが、無理と回答される。厚労省や道庁本庁は富山型サービスを進めていたがそのことは伝わっておらず、資料を集めて説明に行く。しかし、やはり無理と言われる。それで渡邊氏が直接情報を集める必要性を感じて、富山で開催された講座に参加、又共生福祉施設から情報を収集した。

その情報を持って石狩振興局に行っているうちに理解を示してくれ、富山型の視察に行ってくれた。開設するのにまだ共生型ということでの認可は大変なので、1軒屋の1階を高齢者デイサービス、2階を放課後等デイサービスとして申請した。通常サービスごとに玄関を別にすることが求められるが、「共生型」とするのに1つにしたい旨で認可を得た。

開設以来、富山型を開設したいという方がたくさん見学に来ている。既に室蘭、小樽、旭川にあり来年函館、江別にも開設される。この事業については、大きすぎないことが良いと思っているので、開業の支援を行っているが自分の事業として拡大はしないつもりだ。

6. 事業のポリシー

まず「みんなが安心して暮らせる地域を作りたい」という思いがある。

地域には赤ちゃんから高齢者、さらに学校へ行っている、障がいを持っている、生活に困っているなど様々な人たちが暮らしている。そういった人の中には、何らかの支援が必要な人もいる。しかし助けが必要なことは、一人ひとり違っているのに、それをマニュアル化して対応することができるのか、ということに疑問を持った。また支援するための制度にも、介護なのか障がいなのかのように、本当は複数の枠組みが必要なのに、どちらか一方というような「隙間」が沢山あって、その人に必要な支援ができないことが見えてきた。

そのために、誰もが自宅を拠点として来られる「居場所」を作りたいと思い、「雪の華」と「てまりの華」を開設した。どんな障がいでも、どんな認知症でも、どんな病気でも利用を断らない。制度の対象外でも実費で利用してもらえらる。

また、「管理する」ことが「支配」に変化するという構図は、スタンフォード大学の監獄実験（被験者を「看守」と「囚人」に分けて置いておくと、看守が囚人を支配的に扱うようになるという心理実験）などにもあるので、利用者にはマニュアルなしで好きなように利用してもらっている。そして利用者それぞれが「役割」を感じてもらえるようにしている。

また「利用者ファースト」だけでなく「スタッフファースト」であることを目指している。「管

理」の構図は会社組織にもあるので注意している。スタッフが疲弊すると、その矛先が虐待につながると考えるので、まずスタッフが重要である。

7. こんなことが起こっている

開設時に4歳で利用を始めたアスペルガーの男児だが、当初笑顔なく自傷行為が激しくコミュニケーションが困難であった。利用者の中の認知症の元教師の高齢者と組み合わせたら、その高齢者が優しい方で怒らず接しており、男児はその高齢者を信頼してコミュニケーションが取れるようになってきた。それから高齢者とのコミュニケーションが広がり、今では役所に行くときにはついてきて、その場の雰囲気や和ます存在となっている。また、別の94歳の男性は、最初デイにはいかないと言っていたが、今はその子と会うためと言って通ってきている。また1歳半の女の子の見守りもその男性が行っている。

暴言を吐くということで他のデイの利用を断られている男性高齢者もいるが、子供の中では目立たないし、子供をかわいがる。自閉の子供と体操をしたりしてくれる。95歳の女性は、職員には笑顔を見せないが、子供には優しく接する。

利用者にはいろいろなことをしてもらっている。庭の草刈りや料理、畑仕事に子供のシャワーなど、本人がやりたくないことでなければやってもらっている。通常のサービスであればとんでもないことかもしれないが、本人たちはそのことを自分の「役割」と感じてくれているようだ。症状には問題あっても、日常のやっていたことについて高齢者はベテランであり、他では危険と言ってやらせないことでも問題なさそうならやってもらう。

50歳代で若年性アルツハイマーとなった男性は、当初就労支援に行っていたが、コミュニケーションが取れないため利用ができなくなった。60歳で「てまり」の利用をしたが、勝手に表に出かけようとする。これを止めたところ本人は立腹するので、見守って自由にさせると、あるところまで行って戻ってくることが分かった。今では自由に出かけており、落ち着いて利用している。止めて立腹したことで普通は問題行動ということになり、投薬などの対象になるかもしれない。しかし本来自分やりたいことを禁止されたら、誰だって怒るのではないだろうか。彼は表に出ていくことが仕事だと思っているようだ。

重度心身障がいの子供も来るようになった。車いすは人力で運び込む。子供は障がいについて知らないの、その外見に疑問を持ち色々なことを訊いてくるが、それによって子供は障がいについて理解し優しくなっていく。高齢者もいろいろなことが行われ、それぞれの人に何かをもたらすという地域の縮図ではないだろうか。

現在けみ芥見氏と共にDACというアート活動をしている。先ほどのアスペルガーの男児の描いた絵にけみ氏が加筆し共作したものが、現在ニューヨークで展示されている。いろいろなことができると思った。

「ちいき食堂」という活動を月1回している。誰が来てもよく、子供は無料。食材の調達や作るのも地域でしている。50円でわたあめをやったが、子供に人気で大変だった。この活動は地域と

「からまる」ために行っている。

8. まとめ

一生は「いかに幸せに生きるか」ということが重要であり、瞬間瞬間を楽しく生きていくことである。そのために様々な世代が共に過ごせる「ごちゃまぜの空間」であり、お互いを認め合うことで自分らしく生きることとなるのではなかろうか。こういった事は「共生型」だからできるのだと思う。

1人ひとり違うのだから、それぞれ別な対応をすることになるのであろう。福祉・介護に正解は存在しないと考えている。まず福祉に必要なことは愛、やさしさ、思いやり、おせっかいであると思っている。そして本人が選択できる環境を作りが重要である。

スタッフへ要求していることは、「専門力より人間力」。専門力はあって当たり前だが、それよりも人間力を重視している。

介護や障がい者施設を悪いとは思わないが、目指すべきは住み慣れた家で暮らし、役割があり必要とされている場所にいることではないか。それが地域であり共生の場所と考える。

以上 記録：はるにれの里家族会連絡協議会 桶谷

9. その他資料掲載の情報を抜粋

2018年4月より共生型サービス開始。高齢者と障がい児者が同一の事業所でサービスを受けやすくするため、介護保険と障害福祉両方の制度に新たに共生型サービスを位置付ける。

10. 記録者感想

前日まで道内各地でご講演されていたというのに、1時間半立ってエネルギーにお話されました。実際の活動の内容を豊富に盛り込んでいただき、具体的にわかりやすく、ユーモア交えた内容で楽しく拝聴させていただきました。氏の福祉に対する根本的なお考えにも共感しました。共生型は自分自身も高齢化と、子供の障がい者としての高齢化と併せて今後の人生設計の目標になるものと認識しました。

あと氏はフェイスブックをやられており、「くまお」という呼称もあるそうです。興味のある方はそちらも見てくださいとのこと。